

佐河田昌俊の歌一首管見

渡 辺 憲 司

まえがき

近世初期における武家歌人の一人として知られる佐河田昌俊喜六（天正七年～寛永二十年）は、寛永文化の中枢的存在である小堀遠州、松花堂昭乗、林羅山らと親密な関係を持っていたことで知られている。歌人としてはもとより茶人、書家としての彼の名を著名にしたのは、寛永文化圏における幅広い文化人としての活躍によってである。昌俊の生涯については、宗政五十緒氏が、『佐河田昌俊―近世初期の一武家歌人の生涯』（『論集・日本文学日本語4』昭53・角川書店）で触れられている。また拙考「佐河田昌俊の前半生」（『近世文芸31』昭54）においても触れてきた。

本稿では、昌俊の代表的な歌一首をとりあげて、その流布の状況、出典について考え、さらに昌俊の歌学における師承関係について説明を加えながら、成立の背景についても言及してみたいと考えている。また、慶長初年の戦乱期に青春をおくった武家歌人の登場を歌一首を中心に述べ、中世末歌壇から近世初期歌壇における武家歌人の動向についての若干の気ずきを述べてみたいとも思う。

佐河田昌俊の歌一首管見

待 花
吉野山花待つ頃の朝な朝な

心にかかる峯の白雲

この歌は、佐河田昌俊の詠歌の中でもっともよく知られたものである。昌俊の名を世上に流布させたのは、寛永文化圏における活躍によってであるとともに、この歌が名歌としてとりあげられてきたことによると思われる。例えば、『風俗文選』においては、吉野の賦の歌数の多いことを示した箇所で、「佐川田喜六があさなく、貞室老人のこれはくまでかぞふるに中々いとまなからん」と引かれている。吉野山を詠じたものとしても、近世の代表歌として取りあげられてきたのである。

また、この歌の評価の高かったことは、後西天皇（後水尾天皇とも）の勅撰とされている『集外歌仙』に選ばれたことによっても知ることが出来る。『集外歌仙』の成立過程について検討を加えねば

ならないが、選ばれた他の歌人（大名、連歌師）などと比べると、一家臣に過ぎない昌俊への処遇は、破格であるようにも思える。佐河田昌俊の歌人としての位置は、近世後期におけるまで高く評価されたようである。例えば、本居系（本居宣長）の歌人によって選ばれ、近世の代表的歌人を網羅していると思われる『近世三十六人撰』（刈谷市立図書館上文庫蔵）の第三編では、この歌とともに佐河田昌俊が巻頭にすえられている。各編の巻頭の歌人をあげれば、初編は木下長嘯子、二編は細川幽齋、四編は松永貞徳、五編は北村季吟、六編は望月長孝などである。『近代一人一首』第二部には、水戸光圀、伊達政宗以下、五十二名の武家歌人が位階順に並べられていると言う（上野洋三氏「跡部良隆の『近代一人一首』」、『論集日本文学・日本語4』）が、中で佐河田昌俊は、この歌とともに五十番にあがっている。武家歌人の中にあつて昌俊の身分は低い。昌俊がその格差を十分に埋めるだけの力量を備えていたことを推察するとともに、この歌がいかに世上に流布していたかを示している。

随筆類にとりあげられた佐河田昌俊に関する記述においても、この歌はほとんどの場合取りあげられている。『翁草』を始めとして、『雨夜燈』、『北窓瑣談』、『ひともと草』、『雨窓閑話』、『続近世畸人伝』、『歌林一枝』、『謔介集』、『蠅糞』などをあげることが出来る。「佐川田喜六の吉野山朝な〜といへる歌」「佐河田が心にかかる峰のしら雲まづうちうめかれて」「白雲の喜六」などといった形で、佐河田昌俊とこの歌は、不可分の関係で流布されてきたのである。

次に随筆類の中から「翁草」巻五の記述をとりあげて、成立に関

する事情について触れることにする。

佐賀和田喜六

一、同頃、山州淀の城主永井信濃守尚政後に信濃と号す登城有しに、御持被遊し扇に、御手づから歌を一首書せ給ひしを、信濃守拜領して退出有り、家来佐賀和田を召れ、其方は日頃和歌に心を寄せ、風流を好めば、今日拜領の物を拜見させるなり、是は此頃の秀歌なりとて、都より御到来の由、則御自筆に遊し被下しと、彼の御扇を見せ給ふ。

喜六畏て押戴き拜見するに

吉野山花待つ頃のおさなく心にかゝる峯の白雲

喜六泪を流して申しけるは、扱々冥加に叶ひ、上聞達候段、身に余り難し有仕合、生前の大幸、何事か是に増り候はん、此歌は則、愚詠にて候、当春、中院大納言通村郷正保四年内府二仕へ、詠草を差上げ、御添削を奉願候ひし、此歌も其一巻の中に御座候由申て、則、其の詠草を差出す（以下略）

「同頃」とあるのは、大猷院殿即ち家光の時代を指している。家光が殊の外にこの歌を賞したことは、『徳川家光公傳』（昭36・日光東照堂社務所）などにも引かれているが、金閨丈夫氏は「随筆佐河田昌俊」（『文芸博物志』昭53・法政大学出版局）において、真蹟の三幅対があり家光の自筆でよし野山の歌が記されていると報告されている。家光と昌俊の関連について、本稿では加えるべき資料を持たないが、『翁草』の記述で注目すべき点は（伝承的資料としてであるが）、成立に関する記述のあることである。次に「翁草」の記述を粗上にしながら雑感を述べようと思うが、それは「翁

草」における記述が、「吉野山花待つ頃の」の歌の成立に関する代表的なものとして、ほとんど無批判に引用されているためである。

二

「吉野山花待つ頃の」の歌の成立は、「翁草」によれば、中院通村へ差し出した詠草の中に含まれたものだと言う。「当春」とあるのみでその年代は明らかではないが、先に「山州淀の城主永井信濃守」とあり、永井尚政が淀の城主となったのは、寛永十年であるから、それ以降のことと思われる。更に昌俊は寛永十五年に永井家を致仕しているから、昌俊が五十歳より五十五歳までの間のことと推察される。しかし、昌俊が中院通村へ差し出した詠草と思われる一本の中に、この歌は含まれていない。(昌俊は通村へ何回か詠草を差し出しているかもしれない。一本を見た限りで明確化することは出来ないが……)

天理図書館蔵『詠百首和歌』(一冊本、江戸末期写本カ、墨付十一丁)は、題簽題「華梅抄昌俊百首点取」とあり、内題「詠百首和歌」とある。内題の下に

永井信濃守尚政信齋家来、山城、綴喜郡黙々寺開山、号懸壺居士、佐川田喜六

昌俊上

とある。春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋二十首、雜二十首と配列されていて、末尾に「汗墨三十首、通村中院出」と記されている。昌俊が中院通村に批点を乞うたものであると思われる。成立年代は定かでないが、次の歌より晩年期のものと思われる。(圍

佐河田昌俊の歌一首管見

点筆者、()内の数字は配列順の番号。以下同じ)

春 月

(11) なかむればかすめる上の霞ぬる老て、あはれむ春のよの月

落花

(17) 老さそふ、布留の風吹たえて雪おもけなる野辺の松風

晚 鷄

(81) 夜をのこす老か枕にくたかけの声聞はかりうれしきはなし
また、「淀の継はし」「深草の里」「住吉の松」「難波江」といった京周辺の地名が詠みこまれている点などから、昌俊が淀城主となった永井尚政に従って、江戸より京周辺に移った寛永十年、昌俊五十五歳以降の晩年期の作を多く集めたものと思われる。「翁草」で、中院通村に詠草を差上げた二巻というのは、この「詠百首和歌」ではなかったかと思われる。

『正木のかつら』にとられている四首が、『詠百首和歌』に所収のもので、さらに通村が批点した三十首にそのすべてが入っていることを考えると、昌俊の詠草として、かなり一般的に流布していたものと思われる。

「翁草」の作者は、「吉野山花待つ頃の」の歌の出典を、流布していた中院通村批点の一卷にあるものとして、この話を作りあげていたのであろう。(もしくは、作りあげられていた逸話を検証することなしに引用したのであろう)

「吉野山花待つ頃の」の歌の出典は、昌俊の他の歌集に見い出すことが出来る。東京大学史料編纂所蔵「高文書附黙々寺碑銘」(題簽題)の中にある歌集がそれである。「高文書」は全六十三丁のうち、前

半三十四丁は、佐河田家の先祖高階家について記し、次の二十七丁に歌集があり、終り二丁に「黙々寺碑銘」がある。冒頭の第一首の詞書のあとに、「高階尚俊」と作者名が記されているので、ここでは以下「高階尚俊歌集」と呼ぶことにする。昌俊が尚俊と称していたことは、養父木戸元斎編の「師説撰哥和歌集」（天理図書館蔵）の奥書きに記され、また、元和初年頃までの連歌会の記録においても記されている。^(注1)

「高階尚俊歌集」には、次のごとく記されている。

遊行上人よりすくめ給ひし五十首の哥の中に

(10) よし野山花待ころの朝なくころにかゝる嶺のしら雲

以下、歌集の成立及び詞書から、この歌の成立年代を推定することにする。

詞書の「遊行上人」は、昌俊の養父で直江兼統に仕えた越後の武將木戸元斎寿三との関連から、三十三世他阿上人ではなからうかと思われる。

木戸元斎と三十三世他阿上人との直接的関係を示すものは、早稲田大学附属図書館蔵「謙談記」の奥書に

此謙談記者招月作也去々落字等不審條々注有之任本早

遊行卅三世他阿

木戸元斎進献

とある。他に元斎と遊行上人の関連を示すものとして、歌集に時宗の道場の名のあることなどをすでに述べたことがある。(前記、拙考参照)ここでは、この歌の成立に関すると思われる点について触れることにする。

まず問題とすべきは、遊行上人の没年であるが、「防長風土注進案13・山口宰判下」(山口文書館・昭36)の、時宗壽持山善福寺の項に

遊行三十三世他阿満悟上人^{山城國深津國寺近江國三井寺境内善福寺等ノ開山}諸国化度の時、慶長十八年當寺にをいて遷化あり、寺中法林庵に葬れり、其後遊行上人山口在滞の日かならず彼庵に臨みて満悟上人の墳墓を拜するをもて例とせり、天正の頃満悟上人越後国北條より帰国の日人馬宿繼の證書あり、

其文に曰

藤沢上人御帰国之條、傳馬宿送等無異儀可有馳走也仍如件

天正十七年九月七日

直江兼統 判

とあり、上人が直江兼統の庇護を受けて、慶長十八年に没したことが知れる。また「時宗血脈相統之次第」(「時宗の成立と展開」大橋俊雄、昭34・吉川弘文館)には、

天正十七^{壬辰}年於^于越後国北条専称寺^{賦算^{七十}}遊行廿四年 慶長

十七^{壬辰}年二月廿七日於^于周防山口善福寺^{入滅^{十七}}

とある。越後国北条専称寺は、直江兼統が天正十六年に安堵状を与えた地である。(「時宗年表」)

前者の資料では慶長十八年とあり、後者では慶長十七年とあるが、遊行上人が没したのは、まずこの頃であると考えてよいであろう。すなわち、「吉野山花待つ頃の」歌は、慶長十七年もしくは十八年以前、昌俊が三十四、五歳以前に作ったものであると考えられる。

さらに、「高階尚俊歌集」に収められた歌が、年代の記述のある

慶長六年、元齋の没年慶長九年（米沢市立図書館蔵「米沢地名選」拙考参照）の前後、もしくは昌俊が永井直勝に仕えた慶長十二年頃のものが多いことを考えあわせると、この歌は二十歳代に詠じたものであると思われる。

少なくとも、「翁草」の記述から推察されるような寛永期のものではない。昌俊の名が連歌会にしばしば登場し、堂上にもその名が知られるようになった時期のものでもなく、むしろ昌俊が無名であった青年期に詠じられた歌であると思われる。次に昌俊の師承関係に触れ、この歌の背景を考えることにする。

三

昌俊の歌学がつかわれたのは、まず養父木戸元齋のもとにおいてであった。「佐河田壺齋碑銘」（「林羅山文集」^{四三}）には、「玄齋好後歌学昌俊左側與焉」とある。元齋の和歌史における位置については、井上宗雄氏が「中世歌壇史の研究」^{前掲}（昭47・明治書院）において、「^{百首}家四文字題抄」（藤川百首抄）の巻頭にある「二条家冷泉家両家相伝次第」の学統図を引き、「元齋は正吉の孫として二条・冷泉の両家を継受した歌人として誇りを持っていた」と説明されている。また、元齋が「師説撰哥和歌集」（前掲）を、直江兼統の求めに応じて編算したり、上杉家一門の連歌会でも重きをなしていたことなどが指摘されている。元齋は上杉家にあつて、直江兼統を始めとした好学の武将達の和歌の指南役といったごとき立場であったのであろうか。木戸孝範（正吉）の直系を任じて、地方文壇において注目すべき存在であったようだ。

佐河田昌俊の歌一首管見

さらに、元齋は地方文壇のみならず、中央においてもかなり名の知られた人物であったと思われる。元齋（寿三）の名は、紹巴、昌叱らと同座して中央の連歌会にしばしば登場する。天正十六年より文禄三年まで十六回程その名を見出すことが出来る。中でも「連歌作品年表稿」（奥田勲「東京大学教養部人文科学紀要」）などでは天正十九年春の記録が約半数を占めている。

天正十九年の春は、上杉家一門にとってようやくしておとずれた上洛の時であった。前年、天正十八年には年来の仇敵北条氏を秀吉とともに討ち、天正十七年には、腹中の敵佐渡及び能登を平定した。元齋は、北条征伐発向の時の上杉景勝発句の連歌百韻では、第三をつとめ（「大日本古文書、上杉家文書」）、また佐渡戦勝祝賀の連歌会が春日山城内で行なわれた折にも参加している。（「北越雪譜」）状況は元齋にとっても同様であり、この年五月、元齋は兼統の命により大宝寺城の修築の任にあつてゐる。

天正十九年正月、上杉景勝は宿願の参内を果し（「上杉史料集」）「上杉三代日記」昭42・新人物往来社）、元齋は兼統らとともに上洛した。二月二十二日「倭漢連句百韻」（天理図書館蔵「石鼎集」）で、元齋（寿三）は次のごとき人物と一座している。（数字は句数、但し漢数字は漢詩）

白 8 瑠甫八 惟杏八 玄旨 8 西笑八 有節七 紹巴 8 昌叱 8 有和七 兼統六 寿忍 6 実頼 5 寿三 6 梅印六 友益 1

聖護院道澄准后（白）を主客として、安国寺恵瓊（瑠甫）、相国寺承兌（西笑）、南禅寺瑞保（有節）、南禅寺元冲（梅印）などの五

山僧、里村紹巴、昌叱といった連歌師達、加えて上杉家一門の直江兼統、大國実頼、木戸元斎（寿三）らが一座している。上杉一門の上洛に呼応したのであろうか。場所は「時慶卿記」（内閣文庫蔵）の同日の条に「聖門御見廻申候幽齋ニテ和漢在之候」とあり、細川幽齋（玄旨）宅にて興行されたものと思われる。幽齋と元斎は交遊があった。同座した有節の『鹿苑日録』の同年三月十一日の条には

堂僧來。自幽齋元斎返事告報（中略）光源院來訪。茶談移刻、成門送而已。自元斎書簡干待衣。直江公痛甚矣。和漢就韻拒辭（註）再三云々（以下略）

とある。元斎の地位は中央文壇においてもかなりの評価を得ていたと考えられる。

天正十九年初春のこととして、さらに次のごとき和歌口伝の資料のあることが注目される。関西大学付属図書館蔵『歌会作法聞書』（写本、大本一冊十七丁、表紙にうちつけ書きで「飛鳥井雅繼御和歌口傳」とあり、内題「歌会作法聞書」とある。）は、歌会作法五十ヶ条を示したものであるが、その成立事情に関して次のごとき記述がある。まず内題の後に、

千時天正十九初春中之一日越後但馬守實頼飛鳥井左中将雅繼之門弟に被參候時御傳受被成候趣大方注留也

とあり、さらに奥書には

右一卷御相傳之時中将雅繼公之御一會を不漏斗を肝要に書付候文章後見恥入候得共重而御執心之由候之条別而不及清書写して進之候不可有御他見者也

天正十九年

正月十三日

大國但州

人々御中

とある。天正十九年初春に大國実頼が飛鳥井雅繼の門弟となり、傳受を受けた歌会作法を木戸元斎が書き留めて実頼におくったものである。

大國但馬守実頼は、直江兼統の実弟であるが、大國家の養子となり、さらに豊臣姓を受け従五位下を賜った人物であり、上杉と豊臣の連衡に活躍している。兄兼統が漢詩を好んだのに対して、和歌を好んだことは先に引いた「倭漢連句百韻」などによっても知ることが出来る。昌俊とも関連が深い人物で、昌俊が浪人となったと思われる上杉家の会津移封の慶長六年頃に、洛中へ出奔している。（米沢市立図書館蔵「大國系図」等参照）また「高階尚俊歌集」の詞書には、「直江山城守弟大國但馬守実頼と申合て誦侍りける百首の哥の中に名所卯花を」などとある。元斎とはもちろん昌俊とも関連の深かった大國実頼が、飛鳥井雅繼の門弟であったということは、昌俊の師の師承関係にも大きな影響を与えたと思われる。

飛鳥井雅繼（永祿三年「元和元年」）は後に雅枝、次いで雅庸と称し参議雅致の男として家業の和歌・蹴鞠の二道を受けついで。

後水尾天皇の蹴鞠師範をつとめたことよって知られているが、天正末年から慶長期に至る堂上歌壇の中心人物としても注目される。また豊臣秀吉、徳川家康を始めとした諸候との間と密接な関係を持ち、堂上と武家の文化の関係を考える上でも重要な人物である。

連歌会などで雅庸は、細川幽斎を始めとして、木戸元斎の交遊圏とほとんど重なりあう場で活躍しており、共通の文化圏内にあったと考えられる。雅庸は元斎のことはもちろんのこと、昌俊のことをも聞き及んでいたと思われる。

昌俊と雅庸のの關係について、「碑銘」には、

初飛鳥井直相雅庸來駿府見昌俊所詠之倭歌以爲其中有秀逸二篇奏備後陽成院之乙覽

とあり、また「高階尚俊歌集」の詞書には、「駿府国に待る比飛鳥井宰相雅庸へよみてまいらせける廿首の歌の中に」、「飛鳥井殿御門弟に成侍てはしめてまいりける程に」などある。「駿河に侍る比」とは、永井直勝に仕えて駿府に居た頃、慶長末年の二十代後半のことであり、「雅庸來駿府見昌俊所詠之和歌」とは、雅庸が駿府に参向した慶長十六年もしくは慶長十九年のいずれかであると思われる。

昌俊が飛鳥井雅庸と師弟關係を結んだということは、従来ほとんど何の脈絡もなしに説明されてきた。しかし、昌俊が雅庸の門弟となった前提として、木戸元斎、大國実頼といった上杉家一門が飛鳥井雅庸と關連を持っていたことが考えられる。永井直勝の一家臣に過ぎない若輩者の昌俊と、参議雅庸の師弟關係は、一見唐突に見えるが、以上のような背景を考慮することによって納得出来るように思える。雅庸が昌俊を門弟として認めたのは、昌俊の歌の才能を認めたということに加えて、木戸範実、木戸元斎の学統を継受した人物として昌俊を評価していたためではなからうかと思われる。少なくとも昌俊の中には、二条・冷泉家の学統を継受した木戸氏の流れ

佐河田昌俊の歌一首管見

をくむものとしての自負があったであろうと思われる。先にあげた「二条家冷泉家両家相伝次第」の学統図で、正吉（木戸範実）は東常縁系（二条家）と木戸孝範系（冷泉家）の二系を継受したとされているが、「和歌一流經、信家六条家略」（文政四年写本、国会図書館蔵「輪池叢書」^{三九}）によれば、俊成、定家よりの流れは堯孝で東常縁と飛鳥井雅世、雅親の流れに継受され、飛鳥井雅親の次に木戸範実の名があり、範実の学統は細川幽斎、中院通村、鳥丸光広、智仁親王などに引きつがれているごとく記されている。木戸氏の子孫として、昌俊の中には名門の流れとしての自覚も存していたように思える。

「雨窓閑話」では「翁草」とほとんど同じ逸話を述べた後で、

某の侯仰に、此斷普く世に傳ふる所にして、其道の妙感に至ると云ふべし。能々我身にたくらべて、思ひ入れなば、何れのことにも、妙所に至らぬといふ事か有るべき。佐川田は、歌を骨髓に入れて、あはれ秀逸をよみ出ださんと思ふ事、真実にして、其心入れ並々ならぬ故に、終に朝な／＼の名歌をよみ出だして、天子を感動せしめ、將軍の恩賞を蒙り、主人の外間、おのれが名譽、いはん方なし。いはんや、今日聖人賢人の道を行ひ入りて行はんに（中略）人の人たる道をしりて、よく道を行ひ得たるならば、佐川田が朝な／＼の歌の如く、規模を得ん事うたがひあるべからず。たとひ素性いやしきなどゝて、わざにかなひがたしなどゝ云ひて、おのれぎりゆるして置くまじ。太閤秀吉公元より卑賤なり（以下略）

などとある。筆者の視点は朝な／＼の歌が認められたことを例と

して聖人への道に努力すべきであるという点にあるのだが、昌俊が卑賤な身分の者として理解されている点にも着目すべき点がある。卑賤な者、身分の低い者の詠んだ歌が、天子をまた將軍を感動させたという理解は、この歌を著名にした一つの原因とも考えられる。

「近代一人一首」の説明でふれたように、確かに昌俊の身分は低い。身分格差を埋めるだけ朝な夕な^くの歌が、高く評価されていたと考えべきかもしれない。また所謂近世的歌人の登場を意義づけ得るかもしれない。歌一首の「思ひ入れ」によつて評価されたとしたならば、実力評価の近世初期歌壇の美談としても語りつがれるべき話かもしれない。

しかし、おそらくそうではなかった。昌俊には、「素性いやしきなどゝて、わざにかなひがたしなど」といった意識はなかったように思える。昌俊はその出目に關しても、下野国の名家高階家の子孫として自らを意識していたし、木戸元齋の養子としての自負も持っていたであろうし、また、当時の歌壇からも「素性いやしき」者などとは思われていなかったのではなからうか。

昌俊の武家歌人としての出発は、中世歌壇につちかわれた伝統的意識の中で始まったのであり、「吉野山花待つ頃の」歌もそのような意識の中で詠まれたのである。以下、「吉野山花待つ頃の」歌の鑑賞にふれながら若干の気づきを述べることにする。

四

「吉野山花待つ頃の」歌については、いくつかの類歌が指摘されている。「歌林一枝」では

或人云、統古今集のうち知家のうたに、
そむくべきわが世や近くなりぬらんこゝろにかゝる峰のしら雲
又寂然法師の歌に

よしの山花さきぬればあぢきなくこゝろにかゝるみねのしら雲
これはことさらに近し。作者偶然にいでしにやと。按に、昌俊
いかで寂然のうたをしらずしもあるべからず。をりにふれてふ
とこゝろにうかみしまゝに吟せしを、かたはらの人きゝとめて、
この人うたのぬしのやうにもてはやして、後の世までかく傳へ
しなるべし。(以下略)

とある。藤原知家の歌は、「洞院撰政家百首」にあり、寂然の歌は「寂然法帳集」にある。いずれも下の句が「こゝろにかゝる峰のしら雲」とあり、まったく同じである。

「花待つ頃」と言い、「峯の白雲」と結ぶ手法は類型的であり、新味のないものと言ふべきであろうが、中村秋香は、清水浜臣がこの歌の詞をよせ集めて、珍らしさもなく秀逸な歌などと言うのは酷評であるとして、

三十一字の字数少きものなれば、類似の詞はおのづからありもしつべし。ありとでも、其の趣向新しく、姿めでたからむには、秀逸といはではあるべからず。但し、此の歌、寂然集なるとは、尤多く似たりといへども、其の歌がら、寂然のよりは、遙かに立越えられたれば、これまた難つべきにあらじかし(「国学者伝記集成」より)

と述べている。寂然法師の歌よりも「立越えたる」点があり、「趣向新しく、姿めでたく」感じられるというのであらう。確かに寂然

法師の条件的な上の句の表現に対して、昌俊の歌には素直な表現の流れが感じられる。「あぢきなく」の五文字よりも「あさな〜」と破格になりながらも昌俊の歌の方に、全体的形象をふまえた流れのよさゝ姿めでたき調子を感じることが出来る。

寂然法師の歌と詞づかいの類似があるが、むしろこの歌には、次の歌などとかよいあうものがあるように思える。

吉野山雲に心のかゝるより花の頃は空にしるしも 定家

小倉山しぐるゝ頃の朝な朝な昨日はうすきよものもみぢ葉 定家

何となく春になりぬときく日より心にかゝるみよしのの山 西行

おぼつかないづれの山の峯よりか待たるる花の咲きはじむらむ 西行

先にも引いた『師説撰哥和歌集』は、木戸元齋が古今より新古今の百十首に註を加えて編纂したものであるが、中で定家の歌が三九首と圧倒的に多い（以下紀貫之七首、俊成六首など）ことから、昌俊に定家の歌は、かなりの影響を与えたであろうと思われる。また西行に関しては、『高階尚俊歌集』のうちでもっとも多く詞書をもつて、

信濃国にくたり侍りける時に美濃国落あひといふ所をとおり侍るに道より北に小松原の中に古き石塔の高くみえければ馬をひ侍る童に誰墓所そとひ侍るに是なん西行の塚なりといふ馬よりおりて小松かき分りてみればおほくの涼燠うつりかはりけんもあはれにてしは石に腰かけて休らひ侍りける程にかの

佐河田昌俊の歌一首管見

法しみちの国にくたり侍りけるおりに中将実方の墓所にてよみけるかれのゝすゝきの哥おもひいて、

人の上にいひしことはのぬしも又其名はかりに成にけるかなと記してあり、昌俊が西行にも思いを寄せていたことが知れる。また、知家が定家と、寂然が西行と親しかったことも知られてい

る。宗政氏は前掲書において、「吉野山花待つ頃の名歌からは、イマジナブルな心情の表現に見るべきところがあるようである」と述べておられる。「峯の白雲」から広がるイメージを未だ見ぬ「吉野山」にはせながら、「朝な〜」と言ひ、「心にかかる」と花待つ心を詠いあげた、やはり名歌として推賞し得る一首と思われる。平明な詠みぶりの中にも、長く残り得た一首のよさを持つていると言えよう。

今迄に『高階尚俊歌集』『詠百首和歌』の他短冊、書簡類に含まれるものなど二百数首の昌俊の歌を見ることが出来たが、全体的に言へば、左程、個性的と思われるものは少なく、近世初期武家歌壇を代表する歌人としてはいささか物足りなさを感じる。

例えば、『高階尚俊歌集』で

藤川公首の題にてよみける哥の中に湖上朝霞を

霞たつ志賀の海辺の朝ほうけみるめなしとは誰かいふらん
と、藤川百首の題をとつて詠んだ歌などは、『藤川百首周桂抄』
（静嘉堂文庫蔵、正徳三年版）などにおける「正吉曰」といった木戸氏の系譜に従った歌である。柳瀬万里氏は、霞を題材とした歌を比較されて中院通村の歌に感覚の新しさのあることを指摘されてい

る（「中院通村の美的構造—寛永堂上和歌論へのアプローチ」『国文学論叢21』）が、後に通村の教えを乞うた昌俊の歌には、そのような側面をあまり見ることが出来ない。また昌俊は、後年木下長嘯子とも交遊関係を持ち、書簡（陽明文庫蔵、松花堂昭乗、岡本半介宛書簡など）では並び称されるがごとく記されているが、長嘯子に見られるような表現のユニークさにも欠けているようである。平明な詠みぶりという点で言えば、飛鳥井雅庸や木戸元斎さらに永井直勝らとも関連の深かった、細川幽齋に近い詠みぶりであるように思える。

最後に、「吉野山花待つ頃の」の歌の作られたと思われる昌俊の二十歳代の状況について、数首の歌を取りあげながらふれておくことにする。

慶長十二年（昌俊二十七歳）、駿府に移った家康は、永井直勝に命じて、細川幽齋より柳營故実の講義を受けさせ、儀式典故の制定をいそぐと同時に、諸家旧蔵の伊勢物語、古今集、源氏物語などの写しを集め、家康自身も冷泉為満より古今伝授を受け、雅庸からは源氏三箇の秘事の伝授を受けた。△武人禮法に嫻はず▽といった評価への払拭と对公家文化への対応策であると同時に、長い戦乱における混乱の後の文化興隆の到来を示すものであった。それは元和偃武の胎動期ともとらえられよう。昌俊が雅庸の弟子になったのはそのような時期であった。歌集には

飛鳥井殿御門弟に成侍てはしめてまいりける時に寄道祝といふ事を

式嶋の道に心そよせかへる波もおさまる代のしるしとそ

とある。駿河に下り永井直勝に仕え、雅庸の門弟となったことは、昌俊にとって新しい出発であったにちがいない。しかしそれまでの道は、戦乱をくぐりぬけた人物達と同様に、多く辛酸の道であったようだ。

駿河にくだり侍りける時にあひしりたる人たれかれ関山にて送りきて余波おしみければ

名のみしてあふ坂山は甲斐もなし人にわかる、関そとおもへば浪人の後の仕官は、昌俊にとって単純に喜べるものではなかったようである。

心にもあらで東にくたり侍りけるに尾張の国なるみのうらにて千鳥のなくを聞侍りて

浮世かなしほのみちひの浜千鳥おりいる程もなくそたつ数年前まで昌俊は上杉家家臣として、徳川方と敵対関係にあった。慶長五年の大津城攻戦の際には石田方に属し左の股に戦傷を蒙っている。主家であった上杉家は徳川との徹底抗戦をさけて慶長六年八月には会津に移封した。昌俊は主家と行動を共にすることなく浪人の身となり、今は以前敵対した徳川に仕えようとしているのである。めまぐるしい変転は、初句「浮世かな」と慨嘆するところにこめられているのであろう。

慶長六年は昌俊の個人的状況においても記憶されるべき年であったようだ。歌集の中で唯一の詞書を持って

慶長六年十月廿七日の比越のなみ松といふ所へくだり侍りけるに湖のほとりにて

しくれゆく小松かさきの風さえてひらの高根は雪ふりにけり
とある。「越のなみ松」（福井県坂井郡波松カ）で、昌俊は数多
くの恋の歌を残している。

越のなみ松といふ所にとふらふへき人侍りてくたり侍る道にて
冬のため心をおもひける

よもすからものみ増るおもひにも袖のこほりはとけすそありけ
る

なみ松にて尋し人にあひ侍りてむかしかりあくことなげれば
ひさしくとまりけるに親のあたりよりいとはやくくたり侍り
ねなといひをこせければおもひ立侍る暁に

ゆくもうしとまるもつらしおなしくはふたつに分るわか身ともか
な

慶長六年、昌俊二十三歳である。昌俊は変転きわまりない歴史の
流れに身をゆだねながら恋をしたのである。それは親（木戸元齋）
の意志とは反したものであったようだ。「ふたつに分る」八あふさ
きるさVの中に昌俊は身を置いていたのである。昌俊の子昌胤は、
承応二年五十一歳（林羅山詩集）第十六、甲午正月昌胤試亭詩）
であった。逆算すれば昌胤は慶長七年に生れている。昌胤の母はな
み松での「とふらふへき人」なのであろうか。さらに付記すれば、

『下野国誌』（写本一冊、九州大学付属図書館蔵）には、

阿曾沼助大夫は佐野家一門家老ニテ、修理亮宗綱ノ輔佐ナリ、
昌綱侍女ニ通ヒテ懐妊シタルヲ、助大夫密ニ我子ニシテ養育
ス、女子ナリタレバ後ニ足利郡佐河田ノ佳人佐川田喜六ニ嫁ス
（以下略）

佐河田昌俊の歌一首管見

とある。「むかしかりあくことなげれば」とは、「尋し人」が昌
俊と同じ下野国の出身であり、木戸元齋の養子として越後に行く前
の幼なじみであったのであろうか。

昌俊の二十代は、慶長三年の主家上杉家の会津入封により木戸元
齋が藤島城主として五千石を領した（米沢市立図書館蔵「慶長三年
千石以上分限帳」）時から始まる。しかしその盛時もつかの間、二
年後の大津城攻戦で昌俊は負傷し、西軍は破れ、上杉一門も徳川の
軍門にくんだり、慶長六年に米沢へ移封となった。昌俊は米沢に従う
ことなく、越後を離れ浪人の身となった。二十歳より二十三歳まで
わずか三年間の盛衰であった。その激動の中で昌俊は恋をし歌を残
したのである。そして三年後の慶長九年に養父木戸元齋が死ぬ。更
に三年後、昌俊は、自らを放浪の身においやった徳川一門の永井直
勝に出仕したのである。

「吉野山花待つ頃の」の歌は、以上のごとき状況の中で詠まれた
のである。戦乱を経た武士達によくおとずれた「花待つ」安ら
ぎを、また雅庸の弟子になった時の「波もおさまる代のしるし」の
風雅な心をここに感じることも出来るであらう。近世初期武家歌人
の代表歌として、後世に残っていった多くの理由もこの点にあるの
であらう。

しかし、この解釈で終ることは、昌俊の思いをくみとることにな
りえないのではないか。読み手のわたくしは、この歌の平明さの中
に何かを置き忘れているのではなからうか。それは藤原知家の歌と
重なりあわせる時に浮かびあがってくる昌俊の思いである。

知家の「そむくべきわが世や近く……」の歌は、出家を決意した

頃のものと思われるが、かなり知られ、「続古今和歌集」にもとられ、また、「堤中納言物語」には、「わが世や近くとながめ暮すも、心地つくしくたくことがちにて」とこの歌をふまえたと言われる一文がある。昌俊が「堤中納言物語」を知っていたかどうか定かでない。しかし昌俊には「源氏物語」を読んだと思われる形跡があり、かなり古典的教養を身につけていたと思われる。寂蓮の歌とともに、知家の歌も知っていたのであろう。「歌林一枝」の筆者のごとく「ふところにかみしまくに吟せし」歌とのみ解することは出来ない。

吉野山への讃歌と、平和がもたらした風雅への回帰の思いで、「吉野山花待つ頃の朝な〜」と詠じた昌俊の胸中には、知家の「心にかかる峯の白雲」という下の句と、知家のそれとまったく同じであることが、意識されていたにちがいない。六条藤家の盛衰と共に、昌俊の意識下には、知家の名があったのではなからうか。知家の上の句「そむくべきわが世や近くなりぬらん」というイメージが、単に出家への気持を詠んだものとしてでなく去来していたのではあるまいか。昌俊が吉野山の花を待つやすらぎの時を得ることが出来たのは、徳川一門への出仕という「そむくべき」時がもたらしたものである。それは昌俊が左の股を傷つけながら青春をかけた、反徳川への心を犠牲にしたものともとれよう。歴史の波にのまれ「浮世かな」と嘆じ、「なくなくそ立つ」た昌俊の心を、この歌にも垣間見ることが出来るのではなからうか。そして、それは「堤中納言物語」の「ながめ」の心にも通いあっているまいか。ここでは、晩年の黙々寺への隠棲が、年来の宿願であったことを、言い添えるにと

どめておく。

「峯の白雲」を見つめる昌俊の心は、単純に「吉野山花咲く頃」を待っているのではないような気がする。一六〇〇年代（慶長初年）に青春をおくった青年武士がかかえた屈折した風雅への思慕を、わたくしはこの歌に見るような気がしてならない。

注1 「慶長廿年六月十八日何人百韻」（京都大学付属図書館平松文庫蔵「昌球発句連歌」）・「元和三年八月四日夢想之百韻」（国立国会図書館蔵「連歌合集」）など

注2 他に文禄元年二月廿一日、同月廿二日、文禄二年閏九月廿六日、同年十月十二日、同三年十一月五日の条に見える。

注3 天理図書館蔵「源氏物語」の最終冊のうら表紙にはりつけ紙があり、「書入 牡丹花首柏、箱ノ書付佐川田臺六昌俊」とある。

注4 知家は出家後「沙弥蓮性」と署しているが、木戸元斎も「能元斎沙弥休波」（群馬県勢多郡赤城神社蔵「奈良原文書」）と署している。時衆としての関連も想像される。

本稿を成すにあたり、宗政五十緒先生、井上宗雄先生、富田勝治氏、加藤定彦氏には、多くの御教示を得た。附記して深く御礼を申し上げます。